

学術雑誌の現状と学会誌投稿のお願い



久本 秀明

ここ数年、学術雑誌（ジャーナル）の編集にかかわることが多く、現在も本会誌「分析化学」の編集委員長を仰せつかっております。

ご存じのように、ジャーナルを取り巻く環境はこの数年で一変しました。Scopeの似通った新興ジャーナルが乱立し、会員の皆様も投稿先に迷うようになったのではないのでしょうか。一方、検索すればすぐに目的論文のPDFファイルにアクセスでき、投稿先がどこのジャーナルでも読まれる論文は読まれる、という状況で、むしろオープンアクセス（OA）かどうかが「読まれる論文」と「読まれない論文」を分けつつある側面もあります。英国王立化学会（RSC）がOA論文と通常論文で引用回数に差が出るかを毎年調査していますが、昨年・一昨年のデータでは有意な差はなかったものの、RSC自体が一昨年、「今後5年以内にすべてのRSCジャーナルをOA化する」と宣言しましたので、大きな流れとしてはどのジャーナルもこの方向に進むと思います。

また、多数のジャーナルを抱える出版社では同じ出版社内の別ジャーナルへのTransferを積極的に進め、論文（著者）の「囲い込み」も行われています。インパクトファクター（IF）もいろいろ言われてずいぶん経ちますが、ジャーナル各誌ともIF向上には躍起です。中にはIFの数値と掲載論文のクオリティが明らかにミスマッチと思われるジャーナルも散見されます。

言語についても翻訳ソフトの性能が急激に向上し、いまや学生は英語論文のPDFファイルを全翻訳してから日本語で読む時代になりました。書く方も日本語で書いた後に翻訳した方が早いという状況です。賛否は当然ありますが、これは逆に言えば「分析化学」が世界中で読まれる可能性が出てきた、とも捉えることができるPositiveな側面もあります。

このような状況の中、会員の皆様はご自分の論文をどの言語で書いてどのジャーナルに掲載したいと思われますか？もちろん自信作は昔から知られている一流ジャーナルに英語で、と考えるのは自然だと思います。ですが、新興ジャーナルに論文を出すのであれば、本会の学会誌への投稿をお考えいただきたいのです。

本会の学会誌は世界の分析化学関連ジャーナルの中では高評価を受けているとは言いがたい状況だと思います。ですが、「学会がジャーナルをもつ」ということは、「学会員の学術への考え方やマインドを形にする場を提供する」ことだと思います。本会の学会誌は本会構成員の“分析マインド”から形作られ、発展していくべきと思うのです。

本会にはオリジナルペーパーを掲載する学会誌として「Anal.Sci.」と「分析化学」があります。会員の皆様には投稿・引用含め、本会学会誌の発展にご協力賜れば幸いです。

〔HISAMOTO Hideaki, 大阪公立大学大学院工学研究科, 「分析化学」編集委員長〕